福岡で愛され続ける日本酒に。
「駿」を真ん中に、笑顔集まる酒蔵へ。

舞台は福岡県うきは市で130年の歴史を誇る、老舗の酒蔵。
衰退する日本酒市場の中で 失われていく杜氏の誇り…

時代の波に翻弄され、行き詰まり、一度は閉じかけた酒蔵に
一筋の光が差し込んだ。
輝きを取り戻し、今、新しい挑戦を始めた
いそのさわ３つのストーリー

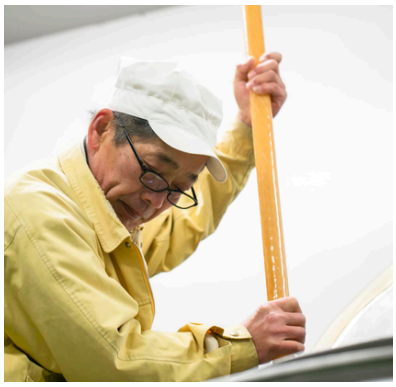
01

自腹で酒蔵を買い受けよう。
社員も負債も、すべて引き受けよう。
53歳で畑違いに挑む、次郎社長の物語

02

“福岡で、愛され続けるお酒に”
うきはの水の旨さと杜氏の術で醸す
再起を賭けた「駿」誕生秘話

03



福岡で1番古い杜氏が見続けた
日本酒市場の変化
老舗酒蔵を支える職人たちの想い

自費で酒蔵を買い受けよう 社員も、債務も、すべて引き受けよう

「うはははは！酒蔵なんて引き受けないほうが絶対いいよ！」と、笑い飛ばす。

広告代理店の経営者でもある酒蔵いそのさわの五代目蔵元、中川次郎社長は、経営危機に瀕した老舗酒蔵「いそのさわ」を畑違いながらも自腹で買い取った。

「いつも笑ってるけど、あの人は、全部、前もって自分で決めてるみたいなんです。こうしてこうしてこうするって、全部決めてから、私には教えてくれる。人が好きで、不器用な人とか、できない人に仕事を回したり、役割や居場所を作ろうとする人なんです。」福岡国際センターで開催された&SAKE FUKUOKAにかけつけた次郎社長のご家族に、「次郎さんってどんな方ですか。」とこっそり聞いてみたら返ってきた答えだ。

目を細くして、目尻を下げ、がはがはと笑う。

「どうにかしてくれって、知り合いから頼まれちゃってさ。帳簿とか決算とか見たんだけど、銀行は全くお手上げだって言うんだ。でもどうにかしなきゃって、経理とか経営の専門家の話とか聞いてるうちに、これならできなくはないよ、って。」押し付けられちゃった、と「純米酒 駿」をごま鯖と一緒にひっかけながら言うのだ。

時代の変化に翻弄された 老舗酒蔵

次郎社長が酒蔵再建を持ちかけられた時、百三十年続く歴史ある老舗の酒蔵「いそのさわ」は時代の変化に翻弄されていた。高度経済成長の流れのまま、薄利多売の道に進んだ結果、造れば作るほど赤字になる、という状態に陥った。

社員は夜遅くまで残業して酒を作り、瓶に詰め、出荷する。休む暇もない。利益の出ない状態が続き、社員も工場も疲弊していた。負のサイクルから、いそのさわは抜け出せなくなっていたのだ。

さらに時代は遠慮なく進む。ワインやビール、発泡酒と酒類は多様化し、日本酒需要は落ち込み続け、日本酒離れに拍車をかけていた。古き良き文化を守ることを優先する想いが、裏目に出てしまうような出来事ばかり続く。

昭和の時代、福岡では酒蔵いそのさわのコマーシャルが流れ、県民の多くに親しまれていた。酒造りの歴史を紡いだその名は、平成、令和と時代を経て、その明かりが大きく揺らぐ。

代々受け継がれてきた光の道は、今にも閉じられようとしていた。

閉ざされかけた酒蔵に差した「一筋の光」

もちろん、何もせずに黙っていたわけではない。前社長は再起をかけて「純米酒　駿」を作った。

ただ、薄利多売を事業の軸とする企業風土が根強く残っていたこともあり、「駿」は作られたまま、月に二本しか売れなかった。前にも後ろにも進めない。そんな状況の中で、いそのさわは次郎社長に託された。

順風満帆で経営する、畑違いの広告会社から、まさかの老舗酒蔵の代表の兼任。

模索し続けた老舗の酒蔵に、一筋の光が差した瞬間だった。

「俺はね、自分の意思がないの。頼まれたことはいいですよって言って引き受けちゃうんだよなぁ。広告会社もそうやって、頼まれたことを一生懸命やってたら出来上がっていっただけだよ。」

そしてまた、ふふふ、と笑うのだ。稀有な存在だ。

「引き受けたときには、負債がもうすごかったんだけど、二年で黒字に変えた。ここからだね。」

笑っていた顔を引き締めて言う。瞳の奥に、強い意志が宿る。

美味い日本酒がある必ず、建て直せる

「何が、引き受ける決め手になりましたか？」理由を尋ねると、即座にその答えは返ってきた。

「蔵に湧く水とその酒が美味かった。これなら皆さんに飲んでもらえるし、売ることに注力すれば、どうにかなると思ったの。それから、杜氏さんたち造り手の技量も素晴らしかった。

うきはの名水の素晴らしさも知ってたし、これなら建て直せると思ったから引き受けた。とにかく、酒が美味かったのよ。」